

## 横断的な鉱山史研究は可能か

ーイギリス帝国史およびグローバル・ヒストリーとの連動に向けてー

杉本 浄

### To Explore Possibilities of Mining Histories through Cross-Border Perspective

Toward Linkages with Colonial India, British Empire and Global History

SUGIMOTO Kiyoshi

#### 1. はじめに

近年、横断的鉱山史をどのように構築できるかについて、手探りのような研究を続けています。主に研究対象とする時代は19世紀後半から20世紀初頭で、対象地域は英領インドと諸藩王国、さらに英領ビルマおよび英領マラヤになります。これらの地域において別々に開発されてきた各種鉱山について、当時流布していた技術や情報を分析することによって、また、鉱山技師たちのネットワークを明らかにすることによって、鉱山同士の繋がりや関連性を浮かび上がらせることが出来ないかを模索しています。別言すれば、こうした繋がりから分かる新しい歴史の領域とは何かを明らかにする試みが横断的鉱山史ということになります。

本稿では、なぜこうした研究に着手するに至ったのか、その動機について次節で述べた上で、第3節から第6節では現在行っている研究の内容について紹介していきます。また、昨年度の後半に半年間いただいた特別研究期間で行った研究についてもここで触れたいと思います。最後に本研究をどのように授業に活かしていくのかについても若干考えてみます。

#### 2. 鉱山史研究の背景

研究を始めた時から鉱山史に特に関心があったわけではありませんでした。もともとはインドの東部に位置するオディシャ州の近代史を専門にしていました。博士論文では、19世紀後半から20世紀初頭のイギリス植民地時代にこの地域で活性化した言語運動に注目し、言語や歴史に基づく地域意識の形成を、社会改革、文化運動、さらに独立運動との関わりの中で検討していきました。

この博士論文の史料調査をしていく中で、オディシャでは鉱物資源が豊富であることを指

摘する文章に出会いました。開発が遅れた地域ではあるが、天然資源は豊富にあり、将来発展する余地が十分にあるといったような行政官の指摘もありました。19世紀後半、オディシャーは後進地域であるという言葉が、植民地官僚からも地元の識字層たちからも出されていたこともあり、発展の可能性を示唆する文言が気になったことが関心を持つきっかけになりました。

もう一つ鉱山史に注目する出来事がありました。博士論文執筆のために、オディシャー州の州都ブバネーシュワルにある州立文書館に文献調査に通いました。たまたま通る近道には鉄道の踏切があり、運が悪いと石炭を満載した貨物列車が通り過ぎるのを待たなければなりません。オディシャー州が石炭を豊富に埋蔵している州であることは知っていましたが、目の前の大量の石炭がいつ、どこで、誰によって採掘が始められたのか、手短に入手できるような資料は全くありませんでした。以上のような経緯で、この地の鉱物資源の開発に興味を持ち始めるようになりました。

鉱山史研究に本格的に着手するようになったのは、2005年9月に博士号を取得した頃になります。しかしながら、実際は他の研究の片手間にやっていた程度でした。当初はどういった文献にあたれば、鉱山について詳しく触れてあるのかが分かりませんでした。そのため、2次文献の検索と同時に1次文献の情報を集めること、さらに年次の行政報告書や当時の地誌から鉱山の項目を抜き書きすることが最初の頃の主な作業になりました。

こうして緩やかに始まった研究ですが、もう一つ博士論文後に始めた研究との関わりが生まれました。自分の足元を見つめる日本研究です。民俗学や人類学を専門とする2名の研究者とともに、新潟県佐渡市をフィールドに共同研究をはじめました。2008年夏の予備調査を経て、2009年10月には研究資金を得ました。当初は廃校舎の利用について実践的な研究をしていたこともあり、「廃校プロジェクト」と称していました。夏期休暇中に2週間前後のフィールドワークを行うようになったのは2010年からです<sup>1</sup>。現在でも研究テーマを広げながら、2016年より設置した「生活文化研究フォーラム佐渡」を母体に共同研究を継続しています<sup>2</sup>。

この研究グループの立ち上げ当初より、佐渡金銀山にも関心を持ちました。次節で述べますが、19世紀後半に佐渡金銀山の近代化に尽力したイギリス人鉱山技師の名前を、観光および展示施設であるゴールデン佐渡を訪れた際に知りました。この時に、先述した植民地支配下にあったインドの鉱山開発史と佐渡島の鉱山の近代化とはどう繋がるのか疑問に思ったのです<sup>3</sup>。そうすると、当初より、横断的な鉱山史に関心を持っていたことになります。

### 3. 19世紀後半の英人鉱山技師ガワーに関する研究

この佐渡金銀山の近代化に関わったイギリス人鉱山技師の名前はエラスムス・H・M・ガワー(1830-1903)と言いました<sup>4</sup>。父はイタリアのトスカーナ地方の港町、リボルノで貿易商を営んでいました。ここで生まれ育ったガワーは、イギリスで教育を受けた後、ゴールド・ラッシュで沸くカリフォルニアに向かいました。金鉱山で技師として働いた形跡はなかったのですが、その周辺の土木工事に携わっていたことは資料から判明しています。その後、弟がイギリスの領事を務めていた北海道・箱館に1866年にやってきました。幕末・明治初めに北海道の

岩内炭鉱や佐渡金銀山において、最初は幕府のお雇いとして、後には明治新政府のお雇いとして合わせて3年ほど働きました。この時彼はイギリスやアメリカの商社を通じて買い付けた蒸気機関を用いて、運送や粉碎などを行う改良工事を各鉱山に施しました。

政府のお雇いの任期が切れると、1872年頃より長崎の町に移り住み、そこを拠点に高島炭鉱などで技師として働きました。トーマス・グラバー(1838-1911)とも親しく、彼の邸宅の側に家を構えました。すでに長崎時代から上海航路で中国大陸にも通っていたガワーは1882年に離日し、英領マラヤへ金鉱山開発に乗り出します。当時、イギリスでは鉱山開発は絶好の投資対象でもあり、彼は資金を集めて仲間と鉱山会社設立して事業にあたりました。

ガワーの長女カロリーナは長崎にあったリンガー商会の社長フレデリック・リンガー(1838-1907)と再婚し、晩年までここで過ごしました。長崎に来たことのあった次女のアリスは、銀行家バーンズと結婚し、一時インドにいましたが、ニュージーランドに移住し、歌手としても活躍しました。

上記の研究成果は第302回東海大学文学部知のコスモス講演会において「19世紀後半の世界における鉱山開発と技師—エラスムス・H・M・ガワーの生涯とともに」(2015年)と題して、一般向けに発表しました。次に、新たに見つかった史料を加えて、文学部の紀要「もう一つのゴールド・ラッシュを追って—19世紀後半の英人鉱山技師エラスムス・H・M・ガワーを事例に—」(2016)として公にしました。また、ガワーが日本に持ち込んだ技術に着目した‘Outside the Gold Rushes: A British Mining Engineer and the Technologies He Introduced in Japan in the Late 19th Century’ (2016) を、スペインで開催された第11回 International Mining History Congress において個人発表をしました。

発表や出版は2015年から16年に集中していますが、調査自体は2009年から2010年にかけて行った研究活動を柱にしていました。また、次に触れるオディシャー州の鉱山史研究と同時並行で進められたものでもありました。

#### 4. インド・オディシャー州の鉱山史へ

ガワーに関する研究が難しい点は、日本以外に目立った史料がなかったことでした。幸いにも研究を始めたころから、インターネットによる検索技術が進みつつありました。当時の新聞記事や官報などから細かなデータが得られるようになってきました。それと同時にオディシャーでの鉱山史関連の文献収集もインドとイギリスに通いながら進めていきました。

オディシャー州の鉱山史に最初に注目したのは炭鉱でした。特に19世紀前半の比較的早い段階でその資源の存在が明らかになったタルチュール炭田の開発過程に目を向けました。しかしながら、この地域で石炭の需要が高まり、実際の開発に至るまでにその後1世紀近くを要することになりました。他の鉱物資源もそうなのですが、この地域では地質や鉱物調査の時代が長くありました。逆に発見から開発の間隔が短かった例に鉄鉱石が挙げられますが、これについては後ほど触れます。

こうして19世紀中の調査過程と開発過程を繋げ、さらに関わりのあった鉱山技師に注目す

る形で始めたのが「19世紀・20世紀初頭のイギリス支配下における鉱山調査と開発及び技師たち」(文部科学省科学研究費基盤研究C、2012年4月-15年3月)でした。研究を進めていくにあたって、インドで活躍した鉱山技師の情報が予想以上に難しく、それ以前に茫漠たる史料に埋もれながら、個別の鉱山に関する詳細な文献すら出会えませんでした。そのためとりあえずは、藩王国を管轄していたインド政庁の政務局(Political Department)の議事録(Proceedings)から、鉱山ライセンスの許可を求める書類や年次の藩王国関連の報告書に記載された鉱物資源の開発情報について地道に情報を集めることにしました。そのためイギリスのBritish Libraryにあるインド省のコレクションにあたりました。その他、19世紀後半の雑誌論文も収集しました。インターネットで公開された地質学や鉱山関連の雑誌も積極的に集めていきました。

その成果としては、19世紀前半からの主に石炭に関する調査過程に注目した発表を「19世紀における地質学調査と鉱山開発—英領インド・オリッサ及び諸藩王国を事例に一」(2012)と題して行いました。現在のオディッシャー州にあたる地域に遺跡調査(1838年)で訪れた植民地官僚のキトー(Markham Kittoe: 1808-1853年)が、先に報告された炭田のありかを確認しに来た際に、偶然にも炭田層を発見したことが、この地での資源調査のはじまりになりました。こうしたアマチュアの調査からインド地質調査局(1851年創設)による本格的な地質・資源調査の開始とその後も同地での調査のバトン・リレーが行われたことで、20世紀に入ってから、この地域での炭鉱開発に繋がっていきます。その背景にはオディッシャーの丘陵部が鉄道でようやく繋がり、それによる石炭の需要が増したことがあります。さらに鉄鋼所の開設や発電所の設置などもこうした需要を支えることになりました。しかしながら、この発表内容は論文としてはまとめ切れず現在に至っており、なるべく早くに形にしたいです。

また、20世紀初頭の鉄鋼石鉱山の開発に焦点をあてた「グルマヒサニ丘陵の開坑：20世紀初頭のイギリス植民地支配下における企業家、藩王、地質学者」についても、現在執筆途中です。開発志向型の開明な藩王、ラモ・チョンドロ・バンジ・デオ(1870-1912)(図1)、インド地質調査局を退職した地質学者、P. N. ボース(1855-1934)、鉄鋼所建設に執念を燃やす企業家、ジャムシェドジー・ターター(1839-1904)。この3者の交わる地点にグルマヒサニ鉄鉱石鉱山の開発(図2)があったことを述べていくものです。はたして、人物伝を繋げて成立する歴史記述が可能なかどうかどうか、いまだ検討の余地はまだありますが、完成を急ぎたいと考えています。

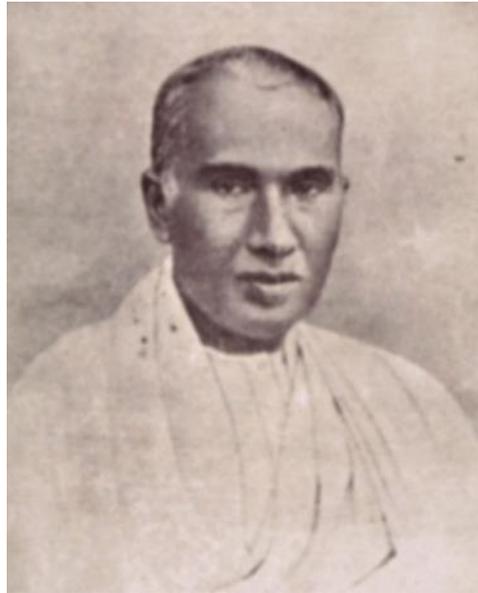


図1 地質学者、P. N. ボース（出典：Bangal 1955）インド地質調査局を退職後、マウルバンジ藩王国に雇われて資源調査にあたった際に、グルマヒサニ丘陵で良質の鉄鋼石を1903年に発見し注目された



図2 マウルバンジ藩王国（現在のオディシャ州北西部の県）にあったグルマヒサニ鉄鋼石鉱山。（出典：

Sarkar 1918)。ターターとのライセンス契約を結んだ後に、1911年に開鉱。サクチー（現、ターターナガル）に建造された鉄鋼所まで鉄道が敷かれ、鉄鉱石が供給された。

以上の鉱山に関する歴史的研究と同時に、2010年度に現代インド地域研究センター（東京外国語大学）に研究員として勤務したこともあり、センターの支援で現代のオディッシャー州の鉱山開発を研究することにもなりました。紹介するのが遅れたのですが、オディッシャー州の丘陵地域は石炭、鉄鋼石、マンガン、石灰石、ボーキサイトなどの鉱物資源の宝庫です。2000年代より需要の増加と外資の導入もあって開発ラッシュに沸いていました。州政府も経済成長の要として鉱物資源を積極的に売る政策に傾いていました。当然のことながらこうした積極的かつ急速な開発には反対運動がありました。近年の開発を巡る反対運動に焦点をあてた「サバルタニティの空間：オリッサ州鉱山開発の過程と被開発者」（2012）と題した発表を行った上で、「資源開発・環境・住民」にまとめました（杉本 2015）。

## 5. 横断的鉱山史研究に向けて

さて、鉱山史に関しては、その研究成果がなかなか論文として完成できない苦しい状況にありましたが、そうした中でも横断的な鉱山史、できれば、インドと日本とイギリスを繋ぐような研究ができないかと本気に考え始めました。既存の鉱山史研究の特徴が多少なりともわかりはじめたことも大きかったです。その特徴は主に次のように分類できます。

①鉱山の運営や資本、投資などの経営面に注目した研究、②労働者の組織や労働運動に関するもの、③鉱山開発がもたらす公害、汚染、自然破壊について批評的に述べるもの、④鉱山技師の育成・教育といった鉱山学校に関わるもの、⑤鉱山の技術史—掘削、排水、排気、運搬、各種機械の導入に着目したもの、⑥鉱山と女性の関わりから鉱山史を見直したもの、⑦強制労働と鉱山を検討したもの、⑧鉱山町の形成と文化—新しい祭や映画、音楽、文学、演劇などとの関わりや文化的異種混交性に注目したもの、⑨上記の特徴を包み込む形で産業遺産（廃鉱になったものが中心）としての意義を問うものなどです。

とはいえ、こうした研究は個別の鉱山に集中し、グローバルな展開や鉱山の連動性や相関性が見えてこないという特徴がありました。横断的な研究はまれで、「おらが鉱山」といった雰囲気は漂わせています。それでも、2015年には世界各地で起こったゴールド・ラッシュを連続的に検討するカンファレンスが、移民史やグローバル・ヒストリーの研究者たちによって実施されました<sup>5</sup>。また同じ年には『グローバル・ヒストリー誌』で鉱山が特集されてもいます<sup>6</sup>。こうした研究が登場しはじめたことも、新しい方向に進む後押しになりました。

こうして「横断的鉱山史研究に向けた基礎研究—英領インドと周辺の鉱山における情報、技術、技師」（文部科学省科学研究費基盤研究C、2019–2021年度）の下で、研究を進めていくことになりました。この研究では19世紀後半から20世紀初頭における英領インドと諸藩王国、英領ビルマと英領マラヤにおける各鉱山開発に着目することで、横断的な鉱山史研究の構築を目指すものです。できれば、イギリス帝国史やグローバル・ヒストリーと鉱山史とを架橋する

ことも射程に入れていきます。

とはいえ、分野は広域ですので、現在、研究対象を鉄鋼石鉱山と金鉱山に絞り込むことにしました。これらの鉱山に流布していた「情報」や採り入れられていた「技術」、さらに「鉱山技師」のネットワークを分析するなかで、何か鉱山と鉱山とを繋ぐ接点が見えてくるのではないかと考えました<sup>7</sup>。そのため、書簡、行政報告、専門雑誌、博覧会と産業見本市の内容などから、これら3つの項目のデータベースを構築する作業を行っています。将来的には検討する領域をオーストラリア、南アフリカ、アメリカへと順次拡大していく予定でいます。

さて、技師のネットワークについては、技師たちの移動の軌跡を可視化できる工夫が必要になってくると考えています。単にデータベースを作成するだけでなく、すでに公開されている技師関連のデータベースと統合する試みも必要になってくるでしょう。技術については、運搬、粉碎、排気・排水、昇降などで、機械化された動力（蒸気機関からディーゼルおよび電気モーターまで）が用いられましたが、この中で粉碎機（Rock Crusher）の技術に的を絞ってみたいと考えています。技術関連の本、論文、広告などからデータを集め、同時代にどのように広がっていたのかを検討していきます。情報については、技師と技術の分析を通して把握できる点がありますが、他に求人情報や広告にも目を向けていきます。特に20世紀に入ると、人づての紹介だけでは技師の需要を埋めることはできず、実際にインドでも新聞に求人載ることがありました。以上の基礎研究を重ねながら、新たな歴史の側面を浮かび上がらせていきたいと考えております。

## 6. イギリス・コーンウォール州と植民地インド

最後に昨年度の後半にいただいた特別研究期間（2019年10月から2020年3月まで）での研究を紹介します。期間中はイギリスのデボン州にあるエクセター大学の訪問研究員として研究活動を行いました。研究テーマを“Global Networks of British Mining Engineers and their Technologies in British India, Burma, and Malaya from the Late 19th Century to the Early 20th Century”としました。前節の科研のテーマにも関わりますが、ここでは技師を通じた英領インドとコーンウォールとの繋がりに着目していくことにしました。

特別研究期間半分以上を、メインキャンパスのあるエクセターの町に滞在しながら、大学図書館・文書館およびDevon and Exeter Institutionで史料調査を行いました。また、エクセター大学は銅・錫の鉱山があったコーンウォール州にもキャンパスを持っており、そこには1888年に創設されたケンボーン鉱山学校を吸収した地質・鉱山学の専門コースが設置されています。鉱山学校から引き継いだ史料はキャンパス内の文書館に保管されています。そのため、ちょうど1か月間、このペンリン・キャンパス近くに滞在しました。

19世紀末よりこのケンボーン鉱山学校から大英帝国、さらに世界各地に向けて技師たちが巣立っていきました。これらの技師たちの足取りを、インドとの関わり（特に南インドのバンガロール藩王国にあった金鉱山であるKolar Gold Fields）に注目しながら、在学名簿や学生たちが編集にあっていた雑誌から追うことにしました。また、この時はレッドルースの町に新設

されたコーンウォール・センター内にある文書館でも文献調査を行い、主に個人史料にあたりました。残りの1か月はロンドンにある National Archives や British Library での調査に充てました。

調査方法についてはこれまでと同様に、鉱山技師と鉱山に関する史料分析とイギリス人鉱山技師との間のネットワークと彼らの技術を明らかにするためデータベースを構築していきました。史料内容は鉱山関連史料として、鉱山学校、鉱山会社、行政側のものを集めましたし、検索が容易になってきた雑誌類（地質学、冶金学、鉱山学、鉱山工学、鉱山や工学系技術者の協会誌など）、さらに電子化が進む新聞各紙からも情報を得るようにしました。

## 7. むすびにかえて—鉱山史を架橋することと授業への反映

特別研究期間中に得られた史料に、1924年6月3日—6日にロンドンで開催された「第1回帝国鉱山・冶金学会議 (The first Empire Mining and Metallurgical Congress)」の5巻本の議事録集があります。この会議の目的は①大英帝国の天然資源開発に関連する科学、技術、経済問題を扱う論文について議論し、②鉱山・冶金学の研究機関に帝国協議会を構築しようとすることにありました。いわば、それまで大英帝国各地でバラバラに行われていた研究・開発に統一的なプラットフォームを設けるものでした。定期開催とはなりませんでしたが、その後も続けられ、帝国解体後はコモンウェルスを冠する会議が開かれていきました<sup>8</sup>。

この第1回の会議では、南アフリカ、オーストラリア、カナダ、インドなどの各種鉱山に関連する研究発表だけでなく、技術や安全性に関わるものもありました。インドについては Kolar Gold Fields と鉄鉱石に関する2つの発表がありました<sup>9</sup>。これらの発表は、先述した鉄鉱石と金のそれぞれの鉱山開発と偶然にも重なるものですが、今後はデータベースの構築を急ぐとともに、この帝国鉱山・冶金会議の分析を加えて、一つの論文にまとめていく予定です。

さて、Kolar Gold Fields とケンボーン鉱山学校との繋がりが見えてきたことで、それまで漠然としていた技師のネットワークも薄っすらとですが見えるようにもなりました。植民地インドに至ったケンボーン鉱山学校の卒業生は、南アフリカやオーストラリアの主流派ではありませんが、確実に存在していました。1947年のインド独立後も、表1にありますケンボーン鉱山学校を卒業した技師が各地に残っていたことがわかります<sup>10</sup>。

以上の研究を続ける中で、各鉱山史を架橋し、横断的な鉱山史の道筋を示せるのではないかと考えております。



図3 南インドのバンガロール藩王国にあった Kolar Gold Fields は1880年にイギリスのジョン・テイラー商会（John Taylor and Sons）社に買収され、設備を更新することで増産体制を敷いた。北から Nundydrog、Oorgaum、Champion、Mysore と称した4つの坑道を有し、最も深いところでおよそ地下3200メートルに達した。こうしたことから多くの事故が発生した。

表1 インドで働いているケンボーン鉱山学校の卒業生リスト（出典：The Camborne School of Mines Magazine, Vol.55, 1955, June, p.44

Central Provinces Manganese Ore Co., Ltd., Nagpur.		
1. T.S. Anderson	2. J. H. Andrew	3. H. Dudley
4. P. P. Edwards	5. R. W. A. Hansel	6. R. S. Stead
7. R. J. Trott	8. E. A. Walker	
Hyderabad Gold Mines Co., Ltd., Hyderabad State		
1. L. C. Curtis	2. N. K. Sarkar	3. F. G. Sharp
Indian Copper Corporation, Mosaboni, Bihar		
1. W. P. Brunton	2. A. J. Cave	3. E. R. Dempster
4. L. T. Evans	5. N. A. B. Hill	6. W. G. T. Morice

7. R. R. B. Pitt- Chambers	8. J. Pryor	
Killeck Industries, Ltd., Bombay		
1. A. Bennett	2. D. P. H. Rowe	
Kolar Gold Fields, Mysore State		
Nundydorog Mine		
1. W. Chand	2. F. N. Cholmeley	3. W. T. Hocking
4. J. T. Jacob	5. D. V. G. Tregaskis	6. K. Trevena
Champion Reef Mine		
1. W. R. Cowlin	2. T. A. W. Haddon	3. J. E. Kernick (Special Course)
4. J. K. Walker		
Mysore Mine		
1. S. Bonds	2. F. R. Dovey	3. L. H. McLaggan
4. H. I. Dunstan	5. J. S. Everett	
Nagpur		
J. S. Williams, Mining Engineer, Takli Road, Nagpur, M. P.		

最後に、以上の研究を授業にどう生かすのかについて触れたいと思います。一つには学生たちに研究のやり方の具体例を示すことにあります。テーマの設定を決めるにあたって、漠然とした状態からいかに研究対象を導き出していくのか、その過程に関して身をもって伝えることです。この過程には先行研究の探索から文献検索の方法、データベースの構築といった技術的な部分を含みます。

以上は伝統的な学問の営為からはみ出すものではありませんが、知的発見の新鮮な気持ちを維持し、授業に反映させていけるように、今後とも鉱山史研究を進めていきたいと考えております。

[付記] 本稿は、2020年10月28日（水）にオンラインで開催された2020年度第1回（通算第8回）文化社会学部研究交流会で行った報告の記録である。

#### 註

<sup>1</sup> このプロジェクトの立ち上げについては、小西・門田・杉本（2014）、および「生活文化研究フォーラム佐渡」のホームページ（<https://sites.google.com/view/forum-sado/>）を参照されたい。

<sup>2</sup> 第1回研究交流会では「2019年度学部等研究教育補助金による佐渡研究について」を第1節で話してから本題に入った。論旨が雑駁になるため、内容については本文から外した。ここでその時の概要を紹介すると、2019年度に補助金を受けた「生活文化研究フォーラム佐渡・夏期合同調査を通したフィールドワークの実践」においては、①宮本常一写真プロジェクト、②林道明資料保存プロジェクト、③さどの島銀河芸術祭への出展、④二見夏学校の4つを実施した。新潟県佐渡市をフィールドに4大学から学部生と院生が加わって活動した。東海大からは①、③、④に合計4名の学部生の参加があった。佐渡での実践的研究と平行して鉱山史研究も行われてきたことになる。

- 
- <sup>3</sup> 筆者が18歳まで佐渡で過ごし、鉱山研究に取り組まれている人々（教師や図書館司書）が身近にいたことも影響していたのかもしれない。
- <sup>4</sup> ガワーについて研究をはじめると際は、当時、「ゴールデン佐渡」の取締役で、鉱山技師で地質学にも詳しい末永武彦氏にインタビューをし、佐渡金山で働いたお雇い外国人だけでなく、鉱山研究で技術を扱う際の注意点についてご指導いただいた（2008年8月）。また、本間滯子氏には鉱山関連の史料について、研究当初から今日までご指導いただいている。
- <sup>5</sup> “Gold Rush Imperialism: Gold Mining and Global History in the Age of Imperialism, c. 1848-1914” Rothermere American Institute, University of Oxford, 16-17 April 2015. その後、この内容は Mountford & Tuffnell eds. (2018)にまとめられた。
- <sup>6</sup> *Journal of Global History*, 10-1, 2015.
- <sup>7</sup> 当初は以上の3つに「資本」が検討項目にあったが、個人で実施できる研究範囲を大きく越えるものと判断し、後の課題として残すことにした。
- <sup>8</sup> ただし、開催数が示されるようになったのは第2回のカナダ会議（1927年）からである。その後、第3回は南アフリカ（1930年）、第4回イギリス（1949年）、第5回はオーストラリア（1953年）で開催された。開催回数を引き継ぎながら、1957年の第6回カナダ会議からコモンウェルスに名称を変えた。
- <sup>9</sup> *Empire Mining and Metallurgical Congress* (1925). インドに関しては2巻に Kolar Gold Fields、4巻に鉄鉱石、石炭、
- <sup>10</sup> インドの鉱山が国有化されていく中で、こうしたイギリス人技師たちはインドを引き上げていくことになった。1956年にテイラー商会はインドの要請により KGF を手放すことに合意した。国有化されてからはほとんどが KGF を離れている。

主要参考文献一覧

小西公大・門田岳久・杉本浄、2014、「協働」を生み出すフィールド—廃校をめぐる研究・開発・教育のはざままで」、椎野 若菜, 白石 壮一郎『フィールドに入る (100 万人のフィールドワーカーシリーズ)』古今書院、pp. 131-151.

杉本浄、2015、「資源開発・環境・住民」、栗屋利江・井坂 理穂・井上 貴子 編『周縁からの声 (現代インド5)』東京大学出版会、pp. 131-151.

—— 2016、「もう一つのゴールド・ラッシュを追って—19世紀後半の英人鉱山技師エラスムス・H・M・ガワーを事例に—」東海大学紀要文学部 (105)、pp.17-34.

Empire Mining and Metallurgical Congress, 1925, *Proceedings of Empire Mining and Metallurgical Congress*, Part.1-5, London: Empire Mining and Metallurgical Congress.

Bangal, J. C., 1955, *Pramatha Nath Bose*, Calcutta: P.N. Bose Centenary Committee.

Mountford, B. & Tuffnell, S eds., 2018, *A Global History of Gold Rushes*, California: University of California Prass.

Sarkar, S. N. 1918, *Biography of the Maharaja Sri Ram Chandra Bhanj Deo, Feudatory Chief of Mayurbhanj*, Calcutta: Mayurbhanj State.

定期刊行物 :

*Journal of Global History*, 10-1, 2015

*The Camborne School of Mines Magazine*, Vol.55, 1955, June.

Web :

生活文化研究フォーラム佐渡

<https://sites.google.com/view/forum-sado/> 最終閲覧日 2021 年 1 月 2 日